



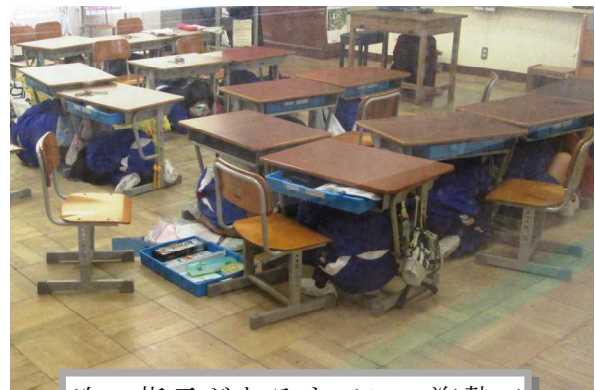
「あたりまえ」を疑う

校長 関原 秀明

昨年の暮れも押し迫った夜、我が家のブレーカーが突然落ちました。真っ暗な上に徐々に寒くなる中、上げては落ちるブレーカーに苦戦しました。地元の電気屋さんに来てもらい、事なきを得たのですが、電気が戻ったときに感じた幸福感といたらこの上ないものでした。

しかし、人は喉元過ぎれば熱さを忘れてしまうようです。今では、スイッチをつければ満たされる環境を「あたりまえ」のようにして生活しています。

先月学校ではJアラート（全国瞬時警報システム）発令に対応する避難訓練を実施しました。火災だけでなく、大きな地震や弾道ミサイル飛来まで想定しなければならぬ時代になりました。学校での避難訓練もあらゆる場面を想定し、緊張感をもって取り組んでいるところです。



次の指示があるまでこの姿勢で待機しています

最も優先すべきは命です。そして、次に考えなければならないことは、東日本大震災の被災地の様子からも分かるように、電気、水、食料、トイレ等「あたりまえ」の生活が一瞬にして失われることへの対応です。それに伴う悩ましい問題もあるようです。

以前、防災教育を進めている太平洋側の小学校の授業を参観したとき、子供たちが話し合っている内容に私も頭を抱えました。

◇家族で避難所に行くことになりました。愛するペットをどうしますか。

◇自分の家に備えてあった非常食を持って家族で避難所へ行きました。周りは持っていない人がほとんどです。そこで自分たちだけ食べ（飲み）ますか。

実に厳しい問いです。救援物資が到着するまで数日かかる場合もあります。

一つ目の問い。

世の中にはペットで癒やされる人もいれば、アレルギーになる人もいます。そんなに広い避難所とも限りません。エサはどうするのでしょうか。これまで被災地ではどうしていたのか、知恵を出し合った避難所の運営について知っておく必要を感じます。

二つ目の問い。

家族が一番大事ですし、わずかな量であれば、他の人に配る余裕ありません。しかし、何も用意していない人々の隣で視線を感じながら食べることができるか、また、ごく親しくしている人や、お年寄り、幼い子供を抱える家族がいたらどうするかなど、次々と問いが浮かんでいきます。誰もが疑わない正解があるのでしょうか。

避難所の様子一つとっても、普段は考えることのない状況に直面します。「あたりまえ」を疑い、考える時間をもたなければと思います。子供たちはこれから想定外も想定しなければならぬ時代に生きていきます。様々な状況の中でも、人と関わりながら、よりよい姿を探ったり、よりよい方法を選んだりする力を付けてやりたいと思います。どう取り組むか、頭を抱えてばかりもいられません。

学校生活の様子から

○防犯ポスター表彰式がありました。(2/1)

国吉校下防犯組合主催の防犯ポスター展で入選した児童の表彰式が、国吉公民館で行われました。(5年生は学級閉鎖のため不参加となりました)



○来年度の新入生が、半日入学を体験しました。(2/5)

来年度入学予定者16名とその保護者の方が参加されました。子供たちは、お絵かきと運動の学習体験をしました。



○大縄跳び大会を実施しました。(2/7)

パワー全開でした!



【大会成績】

○低学年 赤団 76回	○中学年 赤団 220回	○高学年 赤団 242回
白団 48回	白団 148回	白団 245回
青団 82回	青団 112回	青団 206回
○総合優勝 赤団	○応援賞 白団	

☆ 行事の様子はホームページでも紹介しています。是非ご覧ください。